

令和3年度 第2回飯田市総合教育会議会議録

日 時 令和4年 2月17日 午後3時00分開会
場 所 飯田市役所 第2委員会室

1 開 会

○塚平総合政策部長 これから令和3年度の第2回総合教育会議を開催いたします。

この会議は、市長部局を事務局としておりますので、本日の司会は総合政策部の塚平の方で務めさせていただきます。また、まん延防止重点措置期間中ですので会議時間を少し短縮いたしますのでご了解いただきたいと思います。それでは最初に市長からご挨拶をいただきます。

2 あいさつ

○佐藤市長 こんにちは。今年度、2回目の総合教育会議となります。

教育委員の皆様方には、日頃から、市内の小中学生の教育を中心に社会教育も含めて教育全般に、ご尽力、ご協力いただいておりますことを心から感謝を申し上げたいと存じます。

前回、第1回目の総合教育会議の際に、ICT教育をテーマに設定して意見交換をさせていただいたのですが、話し足りないところがあったのかなと思っております。

今回、改めてICT教育について意見交換させていただくことになりました。前回は少しお話ししましたが、私としてはICTというツールが、電子機器を使うということで子どもへの影響について心配な部分も勿論ありますが、そのこと以上に、ICTが飯田市の教育の根幹部分に対して、取って代わるものではないということを確認したいということです。ICTというのは、根幹をなす部分の発展、あるいは、それをより深めていくためのツールとして使えるということだと、そうあってほしいと思います。ICT自体が中心的に取り上げられることで、その中心に、根幹にあるものが見えなくなってしまうのはいませんか。そういう心配をしていたということなのです。そのあたりが、今、現場でどうなっているのか、あるいは、教育委員の皆さんがICTというツールを、飯田市の教育の中で、どのように位置づけて考えているのか、少し掘り下げて、改めて意見交換をさせていただければと思っております。

私としては、これまで先輩の皆さんが培ってきていただいた飯田市の教育の根幹部分というのは、忽せになっていないと信じておりますし、そのことがICTを使うことで良い意味で違う形をとりながら掘り下げられていくものと期待をしているわけです。

また、現場を見てこられた感想も含めて教えていただければ有り難いです。この後、お話をお聞かせいただきながら、ぜひ意見交換をさせていただきたいと思います。コロナ禍において、時間が短めとなりますけれども有効な機会にしたいと思います。

どうぞよろしく願いいたします。

○塚平総合政策部長 ありがとうございます。代田教育長よろしく願いします。

○代田教育長 教育委員の皆さん、関係者の皆さん、こんにちは。

本日は総合教育会議の第2回目ということで、お集まりいただきましてありがとうございます。市長からありましたけれども、この間、教育委員の皆さんには、お忙しい中で学校現場を視察していただきました。教育委員の皆さんの積極的な校長先生方との意見交換や、教室の細かいところまで見ていらっしゃる姿勢を見て、私自身も敬意を表するところです。

繰り返しになりますが、ICT ツールとして、どう生かすかが重要だと思います。その中で、このツールを使って、子どもたちをどんなふうに育てていけるのか、そして、どんな子どもたちを育てていきたいのか、意見交換できるとよいと思っています。

本日はよろしく申し上げます。

3 意見交換

(1) 学校教育における ICT の活用について

○塚平総合政策部長 それでは意見交換に先立ちまして、お手元に資料をご用意しております。

資料No.1は、前回は協議いただいた飯田市教育大綱で、タイトルに「結」と付けさせていただきました。資料No.2は教育基本振興計画中期5年間の重点目標です。

資料3、資料4は湯本専門幹からご説明いただきたいと思います。

○湯本学校教育専門幹 それでは、最初に資料No.3をご覧ください。

資料No.3のはじめに、飯田市のICT教育の概要をまとめております。

教育委員会では、子どもたちの内発的動機付けに支えられた、主体的な学びの実現のため、日々の授業改善に取り組んできました。

昨年度は国のGIGAスクール構想で、児童生徒1人1台コンピュータ端末と、クラウドの利用が整備されました。飯田市でも環境が整備され「協働的な学び」と「個別最適な学び」の取り組みが進み、子どもたちの主体的な学び方まで、様々な事例が報告されてきております。

その事例は資料No.4に紹介しています。非常に多くの事例があり、今回の休校になったときの事例を資料の最後に付けてございます。

一方で、情報活用能力と情報モラル教育の育成が十分ではなかったことがあり、様々な課題が挙がってきたことも確かです。ひとつひとつの課題を認めながら、本日まで取り組みを進めてきております。その経過は資料No.3にあります。

飯田市の子どもたちが、これから来るであろう予測困難な時代を力強く生きていくために、主体的に、豊かな心でコミュニケーションをとりながら、新たな課題に解決していけるような、生きる力を育むためにICT機器を効果的に活用した授業が、さらに工夫されて展開されることになっております。

本日はよろしくお願いたします。

○塚平総合政策部長 ありがとうございます。ここからは意見交換といたします。

先ほど、市長、教育長からもお話がありましたが、ご視察等もされていていらっしゃるということです、そのようなことも含めて、ご発言あればお願いしたいと思います。

○上河内委員 今日、どうぞよろしくお願いいたします。

私も、やはり保護者という立場ですので、自分の子どもの様子から、ICTの教育がどんなふうかと考えてきました。この2年、本当に激動の教育現場だったと思うわけですが、自分の家庭でもタブレットが手渡されて、子どもが持ち帰ってくるようなことも始まりましたし、ずいぶんと変わったなと思います。

2年前、コロナで休校になったときは、本当に止まってしまって、何もできない状態になってしまったわけです。今回は幸い、子どもの学校は休校にはならなかったのですが、例えば、学校で参観日が中止になってしまったときも、子どもが持ち帰るタブレットを接続して、学級PTAや学年PTAができたり、私が仕事で遅れて参加できないときに私の母が参加してくれて、先生の話聞いて「こんなふうなんだねえ」とおばあちゃんと娘の話が弾んだということがありました。これも嬉しい学びだな、嬉しいものだなと思いました。

オンラインでのお話をオンデマンドでも聞けたので、私は後程、校長先生のお話を聞くことができました。その中で、今回、全校で百人一首大会をやろうとしていたけどコロナでできなくなった時に、Kahoot! (カフート) というアプリを使って皆で実現しようよということが、子どもたちからの発案で実現したということでした。Kahoot! (カフート) というアプリを私も知らなかったのですが、クイズとかを自分たちで作れるアプリだそうで、それを使って実践できるというのは、子どもたちが、そういった使い方を知っているからこそできた、自主的にできたということを知って驚きました。時代がどんどんそんなふうに進んでいるのだなと思いました。

そして、そういった、いろんな事情を考えてみたときに、本当に感謝しかないのは、現場の先生方です。全部の学校を見せていただいたわけですが、学校の先生方が本当に大変だったと思うのですが、この2年の間に、様々な活用の方法を「こうが良いか」、「あかが良いか」と模索してくださっていると肌で感じてまいりました。

例えば、タブレットを使って、ご発言のできにくい子どもたちでも自分の意見を打ち込むことで、全員で共有できて、自分の意見が認められたり、発言する体験が積めたりするというのが良いと、いくつかの学校で見せていただいております。そのほかにも不登校の子が関わることもできたなど、いろいろなメリットもあります。

さらに進むことで、きっと課題も見えてきていると思いますが、現場の先生方が素晴らしく頑張ってくださっている、良い知恵を出し合いながら飯田市の子どもたちがコロナ禍の中でも育てられるように頑張ってくださっていると信じております。

以上です。

○塚平総合政策部長 上河内委員ありがとうございました。北澤教育長代理をお願いします。

○北澤教育長職務代理者

上河内委員から、ご家庭でみていらっしゃるお子さんたちの様子からお話があったので、繋がるようなことで、私の方からお話をさせてもらえればと思います。

先ほど市長からありましたし、前回も、ICTは根幹にあるものじゃなくて、あくまでツールとしてあり、文章を読み解くとか、試行錯誤をすることか、体験的な学びをしっかり押さえる、そんなふうにして、人としての土台というか、将来の学びの根っこになる

力が付くように、学んでいってほしいとお話があったかと思います。それに関しては全く同感で、私もその通りだと思っています。

自分の話をするのも変ですけど、ちょうど平成24年から今年で10年間、毎年、市内28校の全部の教室の授業を、時間の長短はありますけれど見させていただく機会がありました。とくに、ここ3年ほどは教育委員さん方や教育長と一緒に、年度のスタート段階と10月・11月頃の年2回、市内28校全部の教室を見させていただき、年3回は全員の校長先生と個別に、学校の様子についてお話を伺う機会を持たせてもらってきました。今年度は、ちょうど一昨日、校長先生方との面談が終わったばかりです。先月下旬にはリモートの授業を自分も受けてみました。そんなところから4点くらいお話をさせていただきたいと思います。

1点目は、市内全ての学校で「学力向上結いプラン」をやっている。自分で考え、判断して、表現や行動ができる、そんな力を付けることを目指して、飯田市では「学力向上結いプラン」を、全部の学校の先生方をお願いして、進めていただいています。

その中身は、ねらい、めりはり、見届け、がしっかりした授業をしましょうということです。子どもたちが主体的に学べるように、興味を持てる問いを設定して、体験活動から、読む・書く・聞く・話すという言語活動、五感などをフルに使って実感として学べる、そういう学びを作っていきますというものです。それも、ずっと続けてきていただいています。そういう授業づくりの中へ、このICTが入ってきたわけです。

今までの学びに加えて、友達との意見の共有がしやすいとか、全員が自分の考えを表現している。先ほど上河内委員からもありましたが、発言の苦手なお子さんの意見は、これまで授業の中で埋もれたままになってしまったり、タブレットに打ち込んで表示することで、ほかの子どもさんにも、誰がどんなことを意見として持ったのかが見える状態になっています。

本当は、声に出して語り合えれば良いのですが、今までは自分のノートにだけ書いてある意見を挙げるか、指名されるかしなければ出せなかったものが、かなり自由にやりとりができる、そういったことがあります。

また、タブレットを通じて共同で一つの作品づくりに取り組む。実際、聞いている授業では、高瀬舟の作品を読んで、それを瓦版にまとめて発表しようとするときに、ひとりではなかなか狭い見方でしかできなかったものを、ペアを組んで、それぞれ自分の持った感想を合わせて皆に効果的に伝える瓦版を作るといった学習です。

まさに、地に足がついた共同学習が成立することを、多く目にするようになってきているのは確かです。

2番目として、そうやってきたからこそ「確かさ」と「豊かさ」といった言葉をキーワードに申し上げます。まずは全ての学びの土台になる、教科書の中身や読み書き計算といった基本的な「確かさ」につながる学習の力は、今まで以上に着実につけていかないとはいけません。ただ、表現しようって言うても、表現する中身自体がないと、いくらツールとしてタブレットがあっても、ただ形があるだけで中身がない。本人自身の内面も育たないと思うので、そこは、これからも大事にしていくことだと思います。

そんな基本的な「確かさ」に、読書だとか多様な思想に触れて、感動体験を重ねて、

学んでいく。なおかつ、学んだことを自分の言葉で、自分の中にどう位置付けていくかという「豊かさ」の部分が、今まで以上に大事になってくるのだろうと思っています。

3点目は、飯田市の強みでもあると思っているのですけれど、そういうことを進めていくには体験不足と言われている子どもたちですので、実の場に立つ体験活動とか、実感のある学びを、さらに充実させていくことが必要だと思っています。

そうしたときに、「飯田型のコミュニティスクール」や「小中連携・一貫教育」の枠組みが、非常に有効に働いていると思っています。もちろん、まだ工夫の余地はあるのですけれど、地域の皆さんが学校に入って、または子どもたちを外に連れ出して、様々な体験の場を提供してくださっている。子どもたちが、そこで学んだことや感じたことを、いかに自分の中に取り込んでいくかというところで、かなりの学校が、地域の皆さんに感謝しながら体験活動をさせてもらっていると思います。

中学では職場体験学習はもちろんですが、さらに発展させて、コロナ禍にあっても、ほとんどの学校はキャリアフェスティバルというカタチで、学校によって40社ぐらいの地元の企業の皆さんに来ていただいて、ブースにわかれて、自分の選んだ、興味のある仕事の説明を聞いたり、質問したりして、レポートにまとめるといったことが進んできています。これについても、地域の皆さんが協力してくださって成り立っていることだと思います。

ある学校で見せていただいたことで言うと、進行も全部子どもたちがやっているんですね。ただ大人の言っていることを聞いているのではなくて、自分たちで作る、そんなキャリア教育の学びにもなっていたなと思います。

今、飯田市では「キャリアパスポート」という小学校1年から高校3年生までの学びを簡潔にまとめ、どんな学びを自分がしてきたかを記録して、高校3年生まで繋げていく枠組みも始まってきているので、そこにICTの機能も活用していくと、さらに生きた学びとして残っていくのではないかと期待しています。

最後に4点目ですが、紙と鉛筆だけとかICTだけとか、デジタルだけアナログだけという、「しか」とか「だけ」から、これからは「もある」の方を、上手に使い分けていく、そういう時代に入ってきているのかなと。実際に話を聞くと、何人もの校長先生から「子どもも、先生も、タブレットだけ使っているというような授業は、今ありませんよ。」と。子どもの必要感のある場面で、その子がより使いやすい方法が、鉛筆か、ICTかっていうところで、学びを作っていくのも普通になっているとの声も聞いています。

昨年導入された直後頃と比べると、かなり変わってきているなど実感しています。今の学校現場の様子を見ていると、不登校のお子さんたちも授業の場には出られないけれど、リモートであったら授業参加ができたという事例を何人も聞いています。そして、登校が始まった後も授業をライブ配信して、おうちで受けて、学びが切れていないというお子さんが何人もいるとも聞いています。

市内の中学校のほとんどになってきましたけれど、今までは、大人のしつらえてくれた体験活動へ、参加しているだけという感じも多くありましたけれど、ここに来て、生徒会などが中心になって、自分たちが地域に何か役に立って、できることはないかを、

地域の皆さんから取材をして、生徒会の委員会活動の中に取り込んで、それまで含めて生徒会活動というふうになっている学校がすごく増えてきました。今までとちょっと違うなど。ただ指示をされて、与えられたものをこなしていただくだけの活動から、自分たちで取材して、自分たちで考えて、自分たちから動くという、そんな中学生たちが、かなり出てきている。これは、高校生の地域人教育や探究学習に繋がっていく、ちょっと飯田市の子たち面白いじゃないかと、最近、心強く思っていて、課題もあるとは思いますが、子どもたちの新しい動きに期待してるぞという気持ちでいます。

○塚平総合政策部長 ありがとうございます。

この2年間で、だいぶ成長したというお話でしたけれども、市長から一言よろしいですか。

○佐藤市長

上河内委員さんからの保護者としての実感というのは、私も今回、鼎小中学校は休校になったので、子どもの家庭での学びについて、日中の様子を聞くと、初めの頃に比べて、少しは、使い方が変化してきているのかなという気はしました。PTAのタブレットでとか、オンデマンドでというのは、まだ鼎ではできておらず、学校ごとの差もあるのかなと思いますが、その様に活用しておられるの素晴らしいと思います。

それから、北澤先生の「ICTだけ」ではなく「ICTも」というお話は心強いと思います。お聞きしながら、頭に思い浮かべたのはヤジロベーみたいなもので、ICTがぶら下がったときにそれをうまく使って、ICTで何か不具合がありそうなところを何か別の体験とか、読書とか、そういうものでバランスをとって、軸を真ん中に保っていく。そのような形でICTを、より深めるためにうまく使っていく。もちろん、ずっとブレないと言っても揺れるのでしょけれど、うまくバランスを取りながら、上に、上に行くという、そういうイメージを、お話をお聞きしながら頭の中に描いていました。

ありがとうございます。

○塚平総合政策部長

野澤委員お願いします。

○野澤委員

昨年の10月に委員拝命いたしました。それまで学校教育の現場を見ることも、ほとんどない生活をしておりますので、私自身がずっと感じていたことと、教育委員というものをお受けした背景と、それから、いろいろ考えていることをちょっとお話させていただければと思います。

お恥ずかしい話なんですけど、私のところの会社の社員、やはり24、25歳ぐらいまでの子たちが、こういう状態ですというのをお話させてもらって、ゲーム依存で仕事に集中できない人が、1人、2人じゃないんですね。

こういう人たちは、何でこういうふうになっちゃったのかなというのが、私が教育委員を受けさせていただいた一つの大きな要因です。今の教育の現場ってどうなってるのか、興味があったのでお受けしました。

初めての教育としての仕事は、学校の訪問だったなと思っています。その中でICTって仰ってるものが何なのかもわからなくて、そしたらどうもタブレットを導入して、そ

ういうものを教材の補完として使っているんだ、というのを認識しました。

これを始めたのが、コロナが始まってというような話だったので2年前ですか、導入をし始めたというような話でした。うちの会社にいる若い子たちは、たぶん、教育現場では、そういうことを何も教育されていないんだなというのはわかりました。

教育長さんたちともお話する中で思ったのは、そういうものを教育現場で使ってもらうということは、今までなかった。今までなかった子たちの結果が、うちの若い子たちの結果だとすれば、何もしないよりはいいだろう、どうかしないはずじゃないかというのはよく感じております。

やはり、ちょっと気になる場所といえば、確かに現場で見たときに、先ほど北澤さんや上河内さんが仰ったように、普段、大きな声で発言しない子たちの意見も確かに、皆が共有できて、それで結果として受け入れられたり、また、皆とマージしたりして、うまく出来るというのはよくわかるんです。

けれども、リアルな社会で、そうは言っても、言葉の発信だとか、自分の自己表現だとか、そういうものは、どこかでやはりできないと、その子の人生にとってマイナスとは言いたくないんですけど、ちょっと損するかなみたいな、そんなことがあると思うんですね。

そういうことも、ICTと言われているタブレットを使う教育の中で、「今回、こうやってあなたの意見が、うまく通ったね、これはよかったよ」と、「だけど、社会に出たときは、ちゃんと声を出してやることも少しは練習した方がいいね」みたいなものも追加していくと、生きる力って先ほど湯本さん仰っていましたが、その生きる力のところに栄養をあげないといけないんじゃないかと思うんです。それが、最終的なところだと思うんです。

たぶん、お子さんたちの教育というのは、結果を求めちゃいけないんだろうと思ってます。でも、私は、事業人はどうしても結果をすぐに求めてしまうので「何でこうなっちゃうんだろう」みたいになっちゃうんですけど、最終的には、その人が生きていって、死ぬ間際でもいいので、幸せだったなと思ってもらえるような教育を受けてもらいたいと思う次第です。

そういうことが、社員にとって、これからの社会にとって、良い方向の一人一人の人生であってほしいなと、いうふうなところを感じますね。

社会が変わっていく中で教育システムの、ある意味で変革を、今、飯田市はしているんだと思うんですけど、それが10年後、20年後、30年後、40年後に「よかったね」と思える形になれるように、それぞれが少しずつ考えて、知恵を出していかなきゃいけないんだろうというのが、私が今感じていることです。少しでも、微力ながらできればいいなというふうに今、思ってる次第です。

○塚平総合政策部長 どうもありがとうございました。三浦委員お願いします。

○三浦委員

前回の総合教育会議の折に、ICT活用の仕方子どもたちに何かあったらどう責任取るおつもりですかと市長が言われました。その言葉を真摯に受けとめて、学校訪問等で、どのように教育で使われているかをしっかりと見てきたところです。

授業では、新しい教材ということで、タブレットや、電子黒板とかが導入されることによって、確かに、興味を引くものに興味移っていて、教育も中心になるところから少し外れてしまっているんだろーというところがなかったわけではなく、そういうときはその場で、校長先生等にきちんとお話ししてきました。そして、タブレットの使い方では、先生方も「使わせなければ」といったところも確かにみられました。

良いシーンも拝見してきております。その中では、授業展開される時に、先生の発問をされる内容が電子黒板からタブレットに写されて、子どもがその資料を見て、考えて、発問した答えを黒板に板書で書いて、子どもたちがそれをノートに取って、紙にまとめていくという授業もありました。

ちょうど印象に残っているのは、権利の授業だったでしょうか。どうしてこれが印象に残っているかという、先生が板書をノートにとっている生徒のためにカーテンを引いたときに「日照権の妨害だ」と生徒さんに言われたことがありました。

考えるということが授業の根幹、コアに移っている授業を、いくつか見てきました。興味はタブレットだとか ICT の教材に移っているのではなく、ツールとして十分に役割が果たされている、豊かなツールであるなど感じられたところがあります。校長先生方にもお話ししてきました、先生方もどれだけ努力をされて、子どもたちの教育や学びを作っているのだから、と教育委員として、とても評価できる点だと思っています。

もうひとつ、リテラシーや情報モラルも、すごく心配されていたところではないかと思えます。前回は、タブレットの導入を車に例えて、免許を取るには子どもじゃなくて取れる年齢があると市長に言われたなど記憶しております。

子どもたち、校長先生、地域、子どもさんを持っている親御さんに、タブレットの使い方等について、私もいろいろ聞いてきました。そういった中では、今、子どもたちは生まれたときから、大人がそういった機器を使っているところを見てきている。テレビに向かってタッチパネルのように触る幼い子がいるし、本当に身近にある。

そうなってくると、きちっとした教育をしていくことは教育行政に必要で「これで何かあったらどうするんだ」という、そういった責任もある。もう一つは、幼いときから情報モラルについて教育してこなかった責任も問われかねない。そう思うと、きちっとした教育を、小さいときから行っていくことも必要です。

もう一つ考えたことが、そういった教育を学校現場ですること、こういった情報の進歩に大人もついていかれていない。学校現場のモラル教育には、もしかしたら、地域にも情報モラル教育が必要なのではないかと感じる場所があります。子どもの発達段階にあわせたモラル教育を教育委員会では行っておりますけれども、親御さんたちも「あ、これってこんなことだったんだな」と気がつくことが必要な場面もあるのではないかな、そういうふうに感じます。

情報モラル教育推進委員会で、この間の校長会の話も見ていまして、これからタブレットを初めて使ってきた学年が卒業していくにあたって、タブレットに入っている学習成果のデータを移すことに関して、個人情報などをどこまで取り扱っていいのか、どこまで移させていいのか、そういうことも質問が出ていました。何かあってからでは遅い

といった視点、何かある前にきちんと問題を考えるというモラル教育がされているんじゃないか、と委員として感じるところです。

もう一つ、情報教育といいますか、ICTについて思うところでは、教育委員の定例会において、ミネルバ大学の話が出たことがありました。こちらは遠隔の授業をされている大学で、ただし、学生寮は世界に7地域あって学生たちが移っていく、そういった大学です。学生寮なので19人と少ない人数ですが、リモートの中でも学生寮でも会話をする、議論する大学とお聞きしました。

これに注目してみようと思ったのは、遠隔授業をツールとして使っていますが、学生寮で学生たちはコミュニケーションをとっている。そして、全世界7か所に、定期的に場所を移るわけですが、そこにある地域の文化に触れる。

そう考えると、飯田市の教育ビジョンは「地育力による未来をひらく心豊かな人づくり」ということで、地育力という言葉も入っています。遠隔、リモート、ICTといろいろ導入されても、やはり、考える、人と触れ合える、そういったものが必要なんだろうと感じます。

私、ちょうど市長さんともお会いしましたが、ワクチン接種会場で看護師のお手伝いをさせていただいておりますが、飯田市を支えてこられたお年の大きい方たちが接種会場に来られると、会場を出て行かれるときに、会場に一礼して出て行かれる方もいらっしゃる。私たち看護職員を労って帰って行かれる方もいらっしゃいます。本当に、心が温かくなる。10代の子どもの接種でも「大丈夫です、ありがとうございます」って言う子どもたちもいます。地育力を育めるというのは、まさしく、そういった地域の中に育まれて育つことでしかなしえない教育なんじゃないかなと思います。

もう一つお話しすると、私の職場は短大ということで、この地域出身の学生が多くいます。学生は私たちと挨拶をしますが、後に短大を離れた教員から「これを当たり前と思わないでね」、「他の大学ではこうではないんだよ」ということを少し聞いていたりもします。

また、フィールドワークでは、他の大学生と一緒にいるときに、食べるものを残していた他大学生に、「どうして？せっかく出してくれたものなのに」とか「好きなものをだけ食べているんじゃないかって」なんて、そのような話を担当教員から聞きました。そういった地域に育まれた人材を育成していかれるというのは、地育力でしかないのかなと思います。

お話がそれたようにも感じますが、でも、顔の見えるなかで、遠隔で知ったものを見る、例えば、市長のお話を聞くときに、飯田市行政のことをネット環境でもしっかり調べることができるか、興味を持ったことに関してもっと調べることができるか、そういったことで知ったものを深められることに使っていけるんじゃないかなと感じています。地育力を含めて、新しい教材を使って、深める、学んでいけるところが、私たちの理想とする飯田市の教育かなと、ちょっと自分の意見も入ってしまいましたが感じるところです。

○塚平総合政策部長 どうもありがとうございました。市長お願いします。

○佐藤市長

野澤さんから、20代の若者の話をお聞きしましたが、私が最初にICT機器に感じた危うさも、そのあたりと相通ずるものがあると思うんです。ゲーム依存という話がありましたが、タブレットって子どもからすると楽しいおもちゃというか、今までの紙と鉛筆の勉強に比べてすごく楽しいところもあって、そっちにあまりのめり込んでしまうと、先ほどから申し上げている真ん中にあるところが、よくわからなくなってしまう。例えば、この間うちの子どもが、学習発表のスライドを作っていたとき、スライドの中身じゃなくて、どうやって見せるか、エンドロールをどう出すかみたいなのところに一生懸命になっちゃって、「そこじゃないだろ」って話があったりする。

ICT機器をどう使うかというときに、根本のところを抜きに、楽しいところとか、面白いところとかに行ってしまうと、真ん中にあるところが、よく見えなくなってしまう危うさを最初の頃に感じていました。このため、前回の会議でのICT教育の議論に、少し強いかたちで問題提起させていただきました。

今の20代前半の子どもたちが、上手く使うというところの教育を受けていなくて、依存になってしまったり、ネットの世界でいろいろなものを得る中でリアル世界にうまく適応できないとすると、そこはぜひ、ICT教育の中で教えていく部分なのかと思います。

生きていく力を得ていくために、今のこのICTの環境だったら良いけれどリアル社会に出たときに少し困ることを、あわせて教えていくことは、本当にそうだなと思いつながらお聞きしていました。

飯田市の教育の目指すところは、生きていく力をつけるということが根幹であるはずなので、ICTと合わせて、地に足のついたかたちで社会に出ていける力を、先ほど北澤さんも仰った読み書きや、あるいは人との接し方も含めて、見失わないで進んでいけば良いと思います。

三浦さんには、前回は少しきつい発言をしてしまったと思っていますが、まさに年齢発達段階に応じて使いこなしていく力をつけていけば良いという、そういうことだと思います。特に、私が心配しているのは、教育委員会の範疇より、もう少し低い年齢なのかもしれませんが、ある時からそういう機器に否応なく接していて、動画サイトYouTubeを見て育つみたいなのが、子どもの中に実際に起こっているのではないかと思うんです。その影響はどうなるんだろうか、その心配を僕はすごく持っています。

小学校のICT教育は、まさに発達段階に応じたかたちで使う力をつけていく、そこを誤ると強すぎる刺激だったり、本来は「こういうことを見つけてほしい」と取り組む予定だったものが別のものにとって代わられてしまう心配とか、そういったことを前回申し上げたつもりでした。今、教育現場の中で、どう使いこなすかという話を、バランスを取りながら考えていただいている。そのことが授業の中から見取れる、ということであれば、そこは当初の心配の状況から少しずつ変わってきている、あるいは私の取り越し苦労だったのかもしれないと思います。

先ほど仰っていただいたように、飯田市の教育の大事な特徴である地育力が、地域の皆さんと一緒に育っていく。その力は、この地域の教育の根幹の一つの要素として、見

失わないことは大事であると思いました。

○塚平総合政策部長 教育長おねがいします。

○代田教育長 ありがとうございます。佐藤市長ありがとうございます。

市長の方からの「根幹は何か」ということに、一言で答えれば飯田市の教育ビジョン「地域力による未来をひらく心豊かな人づくり」に共通認識を持てるのだろうと思います。このビジョンに向かってICTをどう活用するのかということだと思んですが、「心豊か」に関しては、今はやりの言葉で言うとウェルビーイングなんですけど、学校教育の中ではもう少しブレイクダウンしています。自分が自分でいいと思える自己肯定感を高めましょう。そして、自分のことも、そして相手からも認められる相互の承認。自己の確立と相互の承認を得られる関係性を、子どもたちに作っていきましょう。このように「心豊か」を具体的な目標としてやっています。では、飯田市の子どもたちの自己肯定感が高いのか。相互に、お互いを認め合った授業が進んでるのか。ここにはずっと課題があります。

そこで我々としては、ICTを一つのツールとして自己肯定感を高めるような、そしてお互いに認められるような授業を、まず増やしていこうということです。野澤委員が心配されたように、「発言もせずに全部書いていく」ということにはならないと思います。ただ、今、現状としては、意見を問うとほとんど「あの子が発言するから」と思考停止に陥ってしまって、自分の意見が認められるっていう機会が圧倒的に少ないのは事実です。

これは飯田市というより、日本の教育の知識伝達型の教育、教員が非常に有能な才能を持っていたから知識の定着、デリバリー型の授業が進んできた。これは確かに背景としてあります。ただ、子どもたちが将来生きていくためには、まさに、自分で考える頻度や量を増やしていかなくちゃいけない。そうしたときの授業展開がなかなかできない。極論言えば150年前から変わっていない人たちもいます。その中で、自分たちが考えた意見が先生に届く、こういうツールをうまく活用しながら授業改善していこう、まさに心豊かな子どもたちをつくっていこうという流れなので、いきなり150年の教育の歴史の中でうまくできないかもしれませんが、そっちに向かっているんだっていうところを押さえながら進んでいるというのが現状です。

もちろん先生たちを見ていただいてまだまだという授業もあります。ただ一方で、授業発表に、今までとは全く違う、子どもたちの主体性が色鮮やかな授業が出てきたので、そういったことを大事にしていきたいなと思っています。いずれにしろ軸は、心豊かな人づくりなんだというところを改めてここで確認したいと思います。

それと、今日、私が一つ市長と共有したいと思った事案なんですけれども、校長先生方と面談していて生徒会の活動がオンラインによってうすごく活性化しています。

生徒会長の選挙、生徒会・児童会の選挙にも使った学校が出てきました。もちろんオンラインで演説をしているので、その流れというのは自然なんですけど、そこを子どもたちに考えさせたそうです。オンラインで投票するとどういうリスクがあると思う？と考えたときに「ひとりひとり誰に投票しちゃったかがわかる」、「これは漏れたら困っちゃうね」、さらには「データ改ざんできるね」という中で、選挙委員会としては先生

のアドバイスを受けながら、オンラインで投票しましょうというプロセスがあったっ
ていうのを聞いています。

まさに、今、日本の社会が、デジタルの後進国になってしまっていることは、明らか
だと思います。授業での使い方もそうですが、一方で、こういった民主主義社会の中で、
デジタルをどう生かしていくのかということを考える機会は少なかつたんだろうと思
ったときに、子どもたちがすでにやっている。先ほど北澤委員からもありましたけど、
生徒会でもっと自分たちで地域を調べてから行こうよという、今までは授業でどこに
訪問するっていうところから、機会は少なくなっても自分たちで調べて質問項目を考
えようと、まさに主体的に自分から考えて、地域に乗り出すっていうこともできはじ
めています。

そういったところも温かく見守りながら、時として逸脱したときには、学校の中で叱
りながら修正させていくというのが、我々の仕事なんだろうと思います。

まさに、これからの子どもたちの生きる力って言ったときに、デジタルを遠ざけて
も、社会から結局は押し寄せてしまいます。その中で、ゲームに溺れるんじゃなくて、
むしろゲームをうまく活用するような社会風土を作っていけないといけないと思っ
ているので、そういった意味では、一步一步ですが進んでるし、こういったかたちで利
用するということが一番健全な方向に進むんじゃないかなと思って、今日も皆さんと、
短時間ではありますが意見交換ができたこと嬉しく思います。

○塚平総合政策部長 教育長どうもありがとうございました。

おひとり一巡はしていますが、今までのご発言を踏まえてご発言をお願いしたいと思
います。

北澤教育長代理をお願いします。

○北澤教育長職務代理者

良い方向を見つけた話がいくつか出ていましたが、学校という組織を考えると、3月
末で人が入れ替わります。子どもたちも、例えば中学では3分の1が入れ替わります。先
生方も学校によっては3分の1ぐらいが入れ替わってしまう。

先生方が2年間でここまで頑張ってきてくれて進んできましたけれども、来年4月
がスタートしたときに、そこから上へと進んでいけるかという、人が入れ替わり、環
境も変わります。

まだ、ここまで ICT について進んでいない地区からみえる先生方も結構いるわけ
です。各学校で頑張ってきたリテラシー教育も含めて、改めて基本的な研修を先生方にき
ちっとしていただいて、子どもたちにちゃんと指導できる力を、スパイラルでいいから
だんだん高まっていくように、人が変わっても持続可能になるように、これからも本当
に気をつけながら、ICT活用を進めていく必要があると思っています。

それから、言わずもがなのことで、教育大綱の中にも盛り込まれていますが、最近、
読書と呼びかけている声が、正直言って低調になっているのではないかと、自分の中
では感じています。今後は、言葉の力とか、感じる力とかのまさに根幹ですね、そうい
うところをどうやって培っていくかということも、ぜひ話題にしていきたいし、そちら側
の取り組みもないがしろにははいけないと思っています。

以上です。

○塚平総合政策部長 ありがとうございます。

三浦委員お願いします。

○三浦委員 本日はありがとうございます。

最初にミネルバ大学と地育力についてお話しさせてもらったときに、自分で下手な説明だったなとちょっと思ってしまいました。言いたかったことは、本当に遠隔授業やICTを使うにしても、人と人の触れ合い触れ合いというものが大切なんだとお伝えしたかったところです。

コミュニケーションをとれて、信頼関係がある中での遠隔授業となると、例えば、遠山地区との学校間の交流であっても、知っている仲間たちと遠隔授業でリモートとタブレットを使って話し合えると、それは人との関係もないとうまくいかない、全てをそこに頼ってしまうのは問題であると感じております。

よりよい使い方をすることで、学びの幅も広がっていくと感じております。

○塚平総合政策部長 ありがとうございます。

野澤委員お願いします。

○野澤委員 今日はありがとうございます。

先ほど言い忘れたなと思ったのが、若者たちに感じることなんですけれども、しなやかさが無いんですね。

職業人として、初めて会社で仕事をするとすると、全てがうまくいくことなんていうのは、まずありえない話なんです。ですけど、自分の思いどおりにならないことに、非常に不安と苛立ちを感じる子が多いです。

きちんとそれを受け止めて、かわすものは上手にかわして、いなしていくだとか、受け止めて自分のものにするというか、そういうしなやかさが、何か、最近、欠けてきているなっていうのはある。

これは、たぶんICT云々ではなくて、いろんなものが自由に入手できる環境が、ずっと続いていると思うんですよね。自分の思いどおりにできるようになってきている。若い頃からそういう環境なんだなというのはわかるんです。

けれども、どうしても働くっていうのはそういうことじゃ、なかなかうまくいかない部分が多々あると思うので、そういったところとのミスマッチが起きてきているのかな。ちょっと心配なところかな、と私は感じています。

就職ガイダンスとかに我々が出向いていくと、私がこうやって話をしている言葉は、ほとんど無意味です。なぜかという、聞いているようで何も聞いていません。うちの会社のYouTube動画はこれですって言って見せると、それは響くみたいです。ということは、もうあの世代の人たちには、どんなに熱く語ってもなかなか響かなくて、YouTube動画1本を見せて、うちの会社の紹介だってやるとそれが響くという状態になっている感じがすごくするので、怖いなって実は思っています。

北澤さんが先ほど言葉の力って仰っていましたが、やっぱり本来は言葉の力が互いに響き合う、そういうものってあってほしいというのが私の願いとしてあります。以上です。

○塚平総合政策部長 ありがとうございます。

上河内委員をお願いします。

○上河内委員

50代以上というのはテレビからニュースを聞くけれども、今の世代はYoutube 動画やSNS からというデータを見ました。どんどん子どもたちが変わっていく中で、教育の中で不登校が増えてしまったりとか、多様な子どもたちや家庭がある中で、このICTがボンと入ってきたということです。

今後、こういう大きな機会を活用して、どうしたら皆が理解し合えるような力を持つてらるだろうと考えながら、先ほど出てきたリテラシーにもつながると思うんですけども、言葉を読み解くということは、実はICTを導入したからこそ、すごく大事であって、この人はどうしてこの言葉を言ったのか、というところを、いろんな知識を総動員しないと読み解くことができないと思います。

だからこそ、体験の力とか、共有とかが大事であり、それが飯田市のこれまで培ってきたコミュニティスクールとか学習とか、そういったものが生きてくる、一つ良い方向に大きく舵を切れるチャンスだと改めて今日、思いました。

以上です。

○塚平総合政策部長 代田教育長をお願いします。

○代田教育長

先ほど「地育力による未来をひらく心豊かな人づくり」の「心豊か」を少しブレイクダウンして話しましたが、「未来をひらく」ってあるんですよ。これを言い直してみますと、Think Global, Act Localです。

要は、世界の視座で物事を考え、地域で活動しましょう。まさに、今、委員仰っていたように、私たちが大事にしているのは地域、顔と顔とが見える関係、と同時に世界を視座に入れた行動をとっていきましょう。

これはまさに、6年前の第2次教育振興基本計画から取り入れているLG飯田教育の考え方で、私自身はSDGsを先取りしていたなと思いますが、この「未来を拓く」意味でのICT教育が活躍していけばいいと思っています。

○塚平総合政策部長 ありがとうございます。

市長からコメントをいただきたいと思います。

○佐藤市長

もっともっと長くじっくり話したい内容です。

先ほど野澤さんが仰っていた、喋る言葉よりもYouTube 動画配信サイトが響くことは、既に20代の若者たちはそうになっていて、生まれたときから親の言葉よりもYouTube 動画を見て知る可能性が高い子どもたちが、これから育ってくる。

そういう中で我々が、育ちの環境を整えていくとき、ICTの持つプラスの面だけではなくて、先ほどから皆さんから出ている地域の方々とのつながりであったり、あるいは言葉の力であったり、そういうものとバランスを取り、むしろそちら側が重いくらいでバランスをとるなど、世の中の環境からすると考えないと感じます。

我々も「テレビを見たら馬鹿になる」って言われながらテレビを見て育った世代です

から、そのときの大人たちがどんなことを考えていたのかなと思いつつ、今、想像をしています。まさに Youtube 動画サイトなど、自分の周りに気持ちの良い情報だけを見ながら育てていく子どもたちが、自分にとっては嫌な情報だったり、耳の痛い話だったり、そういうこともしっかり受け止めながら、あるいは自分の言葉の力をしっかり付けられるような教育を、飯田市のこれまでの教育の根幹としてきたことの改めての確認としても、これからの ICT 教育を進めていく中で大事にしていかななくてはならないんじゃないかなと思いました。

この間、東原先生と意見交換したところですが、ICT 教育のいいところはたくさんあって、それがレファレンス。調べたいとか、参照したいときに、タッチ一つでその情報に飛んでいけることは確かに素晴らしいことだと思います。しかし、そこに引かれたルート上の情報しか入ってこない危うさがあったり、ネット環境の中においてはその人が好きなことしか選んで与えない、そういう仕組みがあったりするわけです。

その中で、自分の言葉だったり、自分の思考だったりを作っていく力を付けようと思ったら、よほど工夫しないと、ならない環境だと思います。

そういう意味で、教育の部分は本当に大事だと思います。ぜひ教育委員の皆さんには引き続き、お力を貸していただきたいと思います。

ありがとうございました。

○塚平総合政策部長 ありがとうございました。

予定した時間を過ぎておりますので、ただ今の市長の発言で意見交換は終了させていただきたいと思います。

今年度は2回開催させていただきましたが、今日は、大きな方向感としては、共感できたのではないかなというふうに思っております。

また次年度も時機を見て、市長と教育委員の皆様方がこのような意見交換をする機会を設けさせていただきます。その際にも忌憚のないご意見を頂戴するようによろしくお願いいたします。

本日は誠にありがとうございました。以上で閉会といたします。

閉 会 午後4時20分